

上尾幌駅の南側の海岸沿いには、「地嵐別」「来止臥」「地方学」など、アイヌ語由来の難読地名がたくさんあり、私は以前友人と訪ね歩いたことがあります。それぞれ「ちゃらしべつ」「きとうし」「ちっぽまない」と読みます。「難読地名」というよりも、ほとんど「判読不可地名」ですね。



厚岸(あつけし)が近づくと、右車窓に静かな海が見えてきます。海というよりも、湖のように静かです。これは「厚岸湾」といって、蛸(カキ)の養殖で有名な場所です。この先の厚岸駅は、釧路～根室間で、唯一駅員さんがいる「有人駅」です。



厚岸駅の周辺は建物も多く、何となくヒトの気配を感じますが、それも駅の周りだけです。厚岸駅を出てしばらくすると、再び大自然の風景の中に入っていきます。線路は厚岸湾と別れて、水と森と動物たちだけの世界です。この「鉄道以外の人工物」が全く目に入らない広漠とした風景が、根室本線の魅力です。



このあたりは「チライカリベツ川」流域の湿地帯で、まるで尾瀬の風景の中に、木道の代わりに線路が敷かれているような風景でした。チライカリベツ川の「ベツ」はアイヌ語の「川(ペツ)」なので、「チライカリ川」とするのが正しい地名(河川名)です。



(グーグルマップ)

上空から見ても、その表現が大げさではないとわかります。根室本線のこの区間は、人工物のほとんどない、大自然の中にレールが敷かれているのです。



それでも時々駅があります。これは「茶内駅」といって、「茶内原野」の北端にある寒駅です。総理によく似た方が下車しましたが、ここで遊説をしてもあまり効果はないので、党本部が許さないでしょう。



「茶内原野踏切」（画；C.Tanaka）

かつて友人とこのあたりをドライブした時、目的地になかなか着けず、茶内原野付近で日が暮れてしまったことがあります。その時に見た原野の踏切に、強く心牽惹かれました。



茶内駅の駅舎は、典型的な「昭和北海道スタイル」の造りです。駅員さんはいませんが、駅舎にはかつてこの駅から分岐していた「浜中町営軌道」の資料展示室になっています。「男はつらいよ」のロケ地にもなった駅です。



上り釧路行きとすれちがいました。この列車も1両の単車ですが、混んでいました。せめて2両編成にし

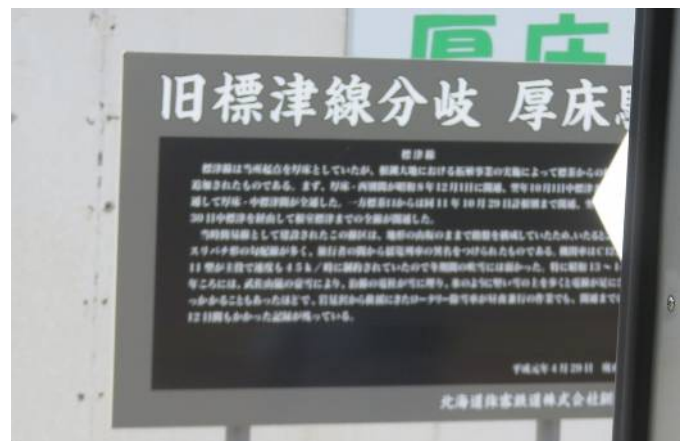
てほしいなあ、と思いました。



浜中駅に着きました。浜中町は、漫画家のモンキー・パンチ（本名加藤一彦）さんの出身地なので、代表作「ルパン三世」の等身大パネルが設置されています。浜中町には畑正憲さんが開設した「ムツゴロウ動物王国」ゆかりの地でもあります。



「厚床（あつとこ）」に停車しました。現在は根室方面への線路だけですが、よく見ると、左（北側）に「線路跡」らしきものが見えます。これは「らしき」ではなく、間違いなく線路跡です。



厚床駅からは「標津線（しべつせん）」というローカル線が分岐していたのです。その話はまた次回。